

「町田」と「まほろ」のあいだ：郊外の文学社会学のために(4)

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

62

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

2015-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021201>

「町田」と「まほろ」のあいだ

——郊外の文学社会学のために（４）——

鈴木 智之

第5章 交錯の場所——三浦しをん「まほろ駅前シリーズ」の「町」を歩く

まほろ駅前の人通りには法則性がなかった。あらゆる方向に流れ、拡散し、ふいに停止し、たむろし、気まぐれに進路を変えた。

（三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』）

1. 「町田」を書き写すテキスト

小説のテキストが私たちの前に現出させる物語空間は、現実の生活空間の「変換」によって成立する。これが私たちの基本的な認識視角である。この時、テキストがその原型となった場所の痕跡をほとんど残さないほど、虚構の色の濃い世界を「創造」することもある（その場合、読者には、完全な「架空」の世界において物語が展開しているように感じ取られるだろう）。その対極には、実在の場所を忠実に再現するかのように、写実的な描出がなされる場合がある（その効果によって、読者は、物語が「現実」の世界で起こったことであると感じるかもしれない）。

私たちがここで取り上げている「まほろ駅前シリーズ」においては、「まほろ」という架空の町の名が与えられることによって「虚構」としての自律性が保たれながらも、実質的には限りなく後者の極に近い形で、物語世界と現実世界との対応関係が維持されている。

実際、「まほろ」とは町田の写像であり、そのことはテキストの中はかなりはっきりとした形で書き込まれている。まずは、いくつかの抜粋に沿って、その点を確認するところから始めよう。

まほろ市民はどっちつかずだ。

まほろ市は東京の南西部に、神奈川へ突き出すような形で存在する。（…）

まほろ市の縁をなぞるように、国道16号とJR八王子線が走っている。私鉄箱根急行線は、まほろ市を縦断して都心部へと伸びている。まほろ市民は、これらを「ヤンキー輸送路」と呼ぶ。（I-60）

東京都の南西部に位置するまほろ市は、人口三十万人を擁する一大ベッドタウンだ。JR八王子線と

私鉄箱根急行線（通称ハコキュー）が交差するまほろ駅前には、複数のデパートが林立し、商店街にも活気がある。ハコキューで新宿まで三十分なので、若いサラリーマン家庭向けの大型マンションも建設ラッシュだ。

駅から少し離れば、一戸建てが密集する住宅街が広がっている。バブル期をピークに、畑や丘を宅地造成して建てられた家なので、築三十年を越すものもある。いまでは子どもも独立し、会社を定年になった夫婦が二人だけで住んでいるケースが多い。（Ⅲ-5-6）

JR 八王子線＝JR 横浜線。箱根急行（ハコキュー）＝小田急。横浜中央交通（ヨコチュー）＝神奈川中央交通（カナチュー）。それぞれの対応関係は明白である。そして、作品中に登場する具体的な場所や施設も、かなりの程度まで、町田市内にその対応物を見いだすことができる。例えば、山城団地＝山崎団地。エムシーホテル＝ホテル ザ・エルシィ。まほろ市民病院＝町田市市民病院。まほろ自然の森公園＝町田市民の森公園。亀尾川＝境川。「コーヒーの神殿 アポロン」＝「コーヒーの殿堂 プリンス」（現在は「The Café」に変わってしまった）など。

このように、町田育ちの作家・三浦しをんが、勝手知ったる地元の町をモデルに作り上げた世界が「まほろ」である。ここでは、変換の程度が、写実的作品のそれに近似する水準に抑えられている。

しかし、そうは言っても「まほろ」は紙上の存在であり、架空の都市であることに変わりはない。では、「まほろ」はどのような虚構空間として構成されており、それが実在の町田とどのような一致やズレを示しているのだろうか。そして、この「微弱な変換」を通じて、物語のテキストは実在の「町」について何を語ろうとしているのだろうか。

2. 「まほろ」のトポグラフィ

作品中で、「まほろ」はどのように語られているのか。さらに何か所か、テキストを抜粋してみよう。

（1）四つのエリアと外縁地帯

まほろ駅前には、四つの区画に分けることができる。南北に走る八王子線と、東西に走るハコキューの線路が、駅を中心に直角に交わっているからだ。

多田便利軒があるのは、南東の区画だった。デパートや商店街のある、一番繁華な場所だ。「南口ロータリー」と呼ばれる駅前広場には、いつもひとがあふれている。

南口ロータリーを抜けた多田は、八王子線のまほろ駅をまえに、しばし迷った。八王子線の線路を越えれば、そこは「駅裏」と呼ばれる南西の区画だ。昔は青線地帯だった歓楽街で、未だに昼間から立ちんぼがいる。客引きをする女たちの背後には、あやしげな古い木造の平屋がひしめきあって、その向こ

うはすぐ川だ。対岸はもう神奈川県。(I-71)

北西にあたる区画には、小さな団地と川しかない。団地に住むもの以外には、なじみの薄い場所だ。北東の区画、ハコキュー北口には、銭湯「松の湯」があるさびれた商店街と、銀行や塾の入ったビルが並ぶ。(I-72)

このように「まほろ」では、交差する二つの鉄道を「境」に、四つのエリアがかなり明確な対照性をもっている。駅の南東には「繁華街」、北西には「団地」、南西には「歓楽街」、北東には「銀行や塾や銭湯」が並んでいるのである。

しかし、「まほろの町」を構成しているのは、「駅」周辺のこれら四つのエリアだけではない。

その外縁に、かなり大きな空間が控えている。そして、「便利屋」の活動範囲は、その周辺エリアにまで広がっている。テキストは、その周辺エリアの様子を次のように語る。

さて、まほろ市はマンションや一戸建てがあるだけではない。さらに郊外には、雑木林や田園地帯が残っている。住宅地に浸食されつつあるが、牛舎と牧場もあるぐらいいだ。大学のキャンパスもいくつも点在し、学生向けのアパートも無数と言っていいほど建っている。

郊外および住宅地と、まほろ駅前とを結ぶのは、横浜中央交通（略して横中^{よこちゆう}）のバスだ。バス路線はクモの巣のように市内に張りめぐらされ、オレンジ色の車体はまほろ市民にとって馴染みの足だった。

単にベッドタウンというだけではくくりきれないほど、まほろ市にはさまざまな境遇のひとが住んでいる。子育て中の若い夫婦も、老人も、学生も、先祖代々受け継いできた土地で第一次産業に従事するものも、都心まで通勤して会社で働くものも。

そして多くのひとが、忙しい日常のなかでちょっとした雑事をこなすとき、だれかの手を借りられればなど思ったりする。重い筆筒^{たんす}のうしろに年金手帳を落としてしまったとき、庭掃除をしなければならぬのに気乗りしないとき、スーパーへ買い物に行きたいのにぎっくり腰になってしまったとき。

そこで登場するのが、多田便利軒だ。

いろいろな立場や事情の人々が住んでいるおかげで、多田はまほろ市で便利屋として暮らしていけるのだった。(III-7)

小山内町には、市内を流れる^{かめお}亀尾川の最源流がある。まほろ市の最奥部、八王子市との境に位置する小山内町は、小高い丘に囲まれた田園地帯だ。谷になった湿地帯は古くから田畑として拓かれ、数軒の農家がいまも米や野菜を育てている。その一角で湧きだす小さな泉が、まほろ市を横断して横浜市に至り、最後は海にそそぐ一級河川・亀尾川の、生まれる瞬間の姿なのだった。(I-227)

峰岸町には二つの大学のキャンパスがあり、もとは畑だった場所を区画整理した、なだらかな風景が広がる。

交通量の少ない道路沿いは、新しく開発された住宅地だ。ログハウスだったり古民家を移築したものだったり北欧風で煙突があったりと、時空を超越した一戸建てが隣りあって並んでいた。(I-277)

この性格を異にする多彩な地域の並存が、「まほろ」的だと言える。各エリアの特徴を抽象化してラベルを付せば、次のような空間図を描くことができる。

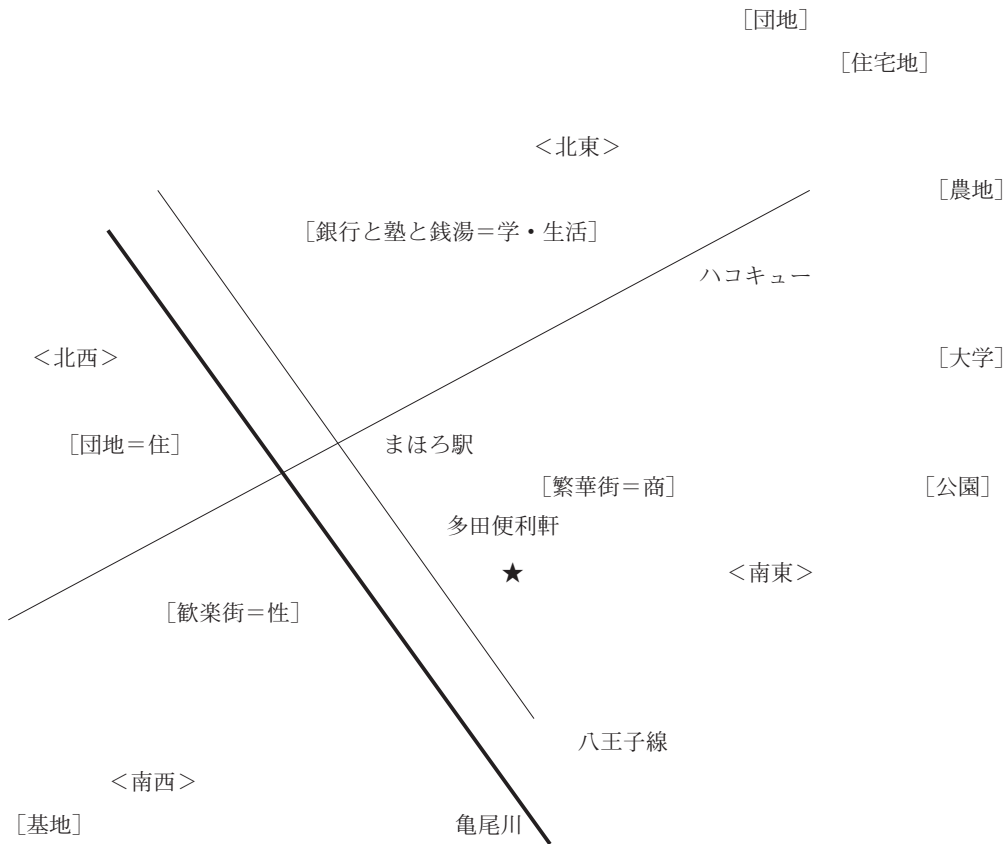


図1：「まほろ」の空間図

「まほろ」という町を特徴づけているのは、都市空間の機能分化の中で、生活の諸要求に応えるだけの「多面的な都市機能」をすべて内在させていることである。「まほろ」には何でもある。それはひとつの「自足的都市」である。

(2) 自足的空間としての「まほろ」

「まほろ」は自足的な空間であるということ。それもまた、テキストの内に明示的に書き込まれている。

おおげさに言えば、まほろ市は国境地帯だ。まほろ市民は、二つの国に心を引き裂かれた人々なのだ。外部からの侵入者に苛立たされ、しかし、中心を目指すものの渴望もよく理解できる。まほろ市民なら、だれしも一度は経験したことのある感情だ。

それで、まほろ市民がどうしたかという、自閉した。外圧にも内圧にも乱されない心を希求し、結局、まほろ市内で自給自足できる環境を築いて落ち着いた。

まほろ市は、東京都南西部最大の住宅街であり、歓楽街であり、電気街であり、書店街であり、学生街だ。スーパーもデパートも商店街も映画館も、なんでもある。福祉と介護制度が充実している。

つまり、ゆりかごから墓場まで、まほろ市内だけですむようになっている。(I-61-62)

東京と神奈川の境界にあり、どちらにも帰属しきれない(「国境地帯」)「まほろ」は、外圧にも内圧にも攪乱されない「自足的生活空間」を構築するにいたった。何でもあり、何でもその中で用が済む。一生(「ゆりかごから墓場まで」)そこに内属して生きていける場所として描き出される。

そして、それはなかなか人をとらえて離さない。(出ていかななくてもいい、のみならず、出ていこうとする足に絡みつくような)粘っこい「磁場」を形作る。「自立的である」が、同時に「閉じている」(人々をその内部に閉ざす力が働く)。

この「何でもある」空間、すべてがその内部で足りるという空間のあり方は、60年代から建設された郊外型の「大規模団地」の設計思想でもあることに留意しておこう。その中だけでやっていける空間を作ること、「団地」においては意識的にそのような設計がなされていた。「まほろ」の町は、その「団地」の思想を、図らずも広域的に実現してしまっている。比喩的な意味で、「まほろ」とはひとつの「団地」である。

(3)「るつぼ(または、階層的サラダボール)」としての「まほろ」

しかし、この自足的空間は、「団地」がそうであると想像されるような「均質な階層性」に特徴づけられる場所ではない。先の引用にあったように、この土地には「さまざまな境遇の人が住んでいる」。「子育て中の若い夫婦も、老人も、学生も、先祖代々受け継いできた土地で第一次産業に従事するものも、都心まで通勤して会社で働くものも」いる。この階層的多様性は、前章において見たように「便利屋」に仕事を持ち込む家族の(言い換えれば、登場人物の社会的属性の)多様性として現れてくる。

旧住民／新住民

旧中間層／新中間層

企業社会・市民社会／アウトサイダー

都市社会学者が言う「るつぼ」または「サラダボール」的な空間。あるいは、その中間状態にある場所。ひとつに溶け合っているとは言い難い。けれど、完全に分離しているとも言えない。この

中途半端さが「まほろ的」である。したがって、「混沌」のイメージが「まほろ」にはある。けれど、全体像を把握できないほど「巨大なカオス」ではない。「秩序を内包したカオス」(II-230)とも表現される。言い換えれば、「まほろ」とは、まったく異質なプロフィールをもった市民が「すれ違い」「交錯する」場である。それは、一般に郊外が均質性によって特徴づけられるのに対し、「雑居性」や「雑種性」のイメージを提示している。

(4) 歴史的重層の場としての「まほろ」

社会階層における「多様性」は、同時に、この土地に対する「時間的な関わり」の落差でもある。言い換えれば、人口の「層」ごとに、この土地に結びつた「記憶」の厚みが異なる。この町で生きてきた「歴史」が異なっているのである。

『番外地』では、「歴史」を異にする登場人物のそれぞれに「視点」が設定され、それぞれの目に映る「まほろ」が語られている。

もっとも古い歴史を語るのは、「曾根田のばあちゃん」。

さらには、地元の農家であった「岡夫妻」。

多田の両親は、長野の田舎から出てきて、まほろに住宅を買ったとされる。

行天の家族は、おそらくもう少し古くからまほろに住んでいる。

多田啓介や行天春彦は、まほろ生まれである。

これに対して、柏木亜沙子は、「大学入学」と同時にまほろにやってきた。

ルルやハイシーは流入者。

こうした、多様な時間的関わり方は、「まほろ」について累積された記憶の多層性(かつ、交わることなく流れている並走的な時間性)を意味している。彼らは、「まほろ」という空間に現時点において「共存」しているが、同一の時間を生きているわけではない。それぞれの記憶が「集散的記憶」としてひとつに溶け合う構図にはなっていない。そのような「線」の交錯として「まほろの時間」は動いている。

その時間的な多様性(記憶の多層性)は、とりわけ『番外地』において印象的に提示されている。

『番外地』では、章ごとに視点人物が入れ替わり、それぞれの語りが展開されている。例えば、第3章「思い出の銀幕」では、曾根田菊子の回想が語られる。

「思い出の銀幕」

かつてまほろ駅前にあった「まほろばキネマ」は、菊子の祖父が大正時代に建てたもの。菊子は、その映画館の「看板娘」として働いていた。(「まほろばキネマ」はその後「ニューまほろロマン」というポルノ映画館になり、現在は、取り壊されて跡地にマンションが建っている)。

菊子は、自分の「ろまんす」を、病室で多田と行天に向けて語り出す。仮に、その相手の名前を「行天」ということにして。

敗戦から二年後。ようやく活気を取り戻しつつあったまほろの町。菊子は偶然、街中でチンピラに追

われている一人の男（「行天」）を助ける。菊子には、出征したまま帰ってこない許婚がいた（曾根田材木店の息子。仮のその名は「啓介」と語られる）が、その後「まほろばシネマ」に現れるようになった「行天」に惹かれていくようになる。「カフェー アポロン」で逢引きを重ねる二人。しかし、そこへ「啓介」が戦地から戻ってくる。菊子は、許婚が戻ってきたことを「行天」に告げ、「あなたの家に連れて行って」と願う。駅の裏側（青線地帯のある地区）にはじめて足を踏み入れる菊子。二人は関係を結ぶ。

ところが、「啓介」は、それでも婚約は解消しないと言う。そして、なぜか「行天」と「啓介」のあいだに「親交」が生まれる。二人の男のあいだで揺れる菊子。一年後、「行天」は「曾根田建材店の息子と結婚すればいい」と言って、姿を消す。地元の岡山組ともめ事を起こしていたらしいという噂が流れる。菊子は啓介との生活を始める。

かつて駅前に「まほろばキネマ」があったことを知る者と、もはやその跡形もない風景しか知らない者とは、空間的に同一の地点であっても「場所」としての意味は異なる。場所は、かつてそこで起こった出来事、くり広げられた物語の記憶を宿している。

第4章「岡夫人は観察する」では、山城町の旧農家に嫁いできた「岡夫人」の目線で、「多田と行天」の様子が語られていく。

「岡夫人は観察する」

山城町に暮らす岡夫人は、長年連れ添ってきた夫の様子と多田便利軒からやってくる二人の若者の様子を、冷静に、かつ穏やかに見守っている。

歳をとって、頑固になり、ぼけはじめてるように思える夫。いろいろと不満を覚えながら、岡夫人は二人の関係をいとおいしいものと感じている。

他方、少し前から常連客となっていた便利屋のことも気になる。寡黙でどこか寂しげであった多田は、行天という名の助手を連れてくるようになってから、気持ちの揺れ動きを表に出すようになったこと。行天という挙動の不思議な青年が、自分の家の近くに住んでいた、まったく感情を表出しない少年の成長した姿であることに気づく。

ある日、庭の掃除を頼んだ便利屋の二人の様子がおかしい。何となく喧嘩をしているようである。それとなく尋ねてみると、多田が受け取った高校の同窓会の通知に、行天が勝手に丸をつけて返送してしまったという。同窓会に行けばいいのにと勧めるが、「これまでのことを詮索されたくもないので」という理由で、気乗りしない様子。触れられたくない過去をもたない岡夫人には多田の気持ちはよく分からない。しかし、どこへ逃げたとしても、過去は心の中によみがえるものではないかと彼女は思う。

こうして、少年時代の行天の姿は、同じ町に住んでいた女性の回想の中に浮かび上がる。この相互的な（決して全面的に共同体化することのない）まなざしの交錯が「まほろ」という地域を構成

しているのである。

(5) デッドエンド（どんづまり）としての「まほろ」

その「まほろ」に、人々は流れ着き、そして出ていかない。あるいは、また舞い戻ってくる。

まほろ市民として生まれたものは、なかなかまほろ市から出ていかない。一度出ていったものも、また戻ってくる割合が高い。多田や、行天のように。

外部からの異物を受け入れながら、閉ざされつづける楽園。文化と人間が流れつく最果ての場所。その泥っこい磁場にとらわれたら、二度と逃れられない。

それが、まほろ市だ。(I-62)

では、その先に何があるのか。

ある意味では、何もない。

確かに、それなりの歴史はある。しかし、「未来」はあるだろうかと問われれば、誰も「まほろ」の未来像を語れない。果てしない「日常」の空間としての「まほろ」。「デッドエンド」としての、「袋小路」としての、あるいは「どんづまり」としての。

しかし、そういう「明るく開けたりしない（将来への展望を欠いた）」日常を、いとおしむようにして描くこと。そこに、三浦しをんのいつもの手並みが見える。

3. とらえがたき町としての「町田」

多面的で多層的。混沌としていながら、全景が見えないわけでもない空間。自足的で閉鎖的。外から入ってくるものを飲み込みつつ成長していくが、どこにも出口のない「町」。そして、重層的な歴史を抱えながら、たどり着くべき（将来）像を見失っている「町」。

この「まほろ」の像は、現存する地域としての町田のありようを、このテキストなりに映し取ろうとするものである。

これを踏まえて、視線を町田の方に向けてみよう。しかし、実のところ、町田はよく分からない町である。地理的にも、歴史的にも、象徴的な空間構造においても、つかみどころがない。町田という地域の構造を簡潔に提示するのは、なかなか難しい作業であるように思われる。

以下の一文は、『はじめてのわかりやすい町田の歴史』（1990年）に、町田市長・寺田和雄がよせた「序」の一部である。

町田市は東京都多摩地区の南端に位置し、半島状に神奈川県に突き出している。要するに、三方は神奈川県に囲まれ、僅かに北辺の分水嶺をもって東京都に接続しているのみである。この地域に降った雨水のほとんどは、鶴見川、境川を経て神奈川県下に流下し、都心から町田市に至る幹線道路や鉄道は、

いったん神奈川県に入ってからでないと町田市に到達できないのである。

(…)市域の大半は多摩丘陵で、丘陵の連なりと谷戸の織りなす複雑な地形は万葉のころから多摩の横山と称され、町田市の雅趣ある景観を形作っている。しかし、武蔵の国でありながらいわゆる「武蔵野」に含まれず、異端の地域でもある。

このように町田市は、地理的にみる限り簡単に「多摩地区」の一部ともくくられず、かといって「相模」でもなく、まさに町田は「町田地方」としか云いようのない独自のカラーをもっていると思う。

古代・縄文の時代から中世、近世、ことに特色ある鎌倉期、そして小山田武将の興亡、町田の自由民権運動などの歴史をみると、何かしら町田の特色をそこに見出すことができる。そういう意味で私は、独自の地域としての「町田」は今日もお引き継がれ、日々歴史がつくられているものと思えてならない。(堀江1990:1-2)

神奈川でも東京でもない、武蔵野でも相模でもない、「独自のカラー」をもった地理的空間。「異端の地域」、「独自の地域」と市長は言う。武蔵野の一部としては把握できない。相模原かと言えばそうでもない。ではいったい何か、と問われた時に、「AでもBでもない」という形でしか語りえない。そこに「町田地方」の独自性がある(決して「わかりやすい」話ではない)。

歴史という観点からはどう見えるか。現在の町田地域には、縄文時代から、連綿と人が住んでおり、それぞれの時代の遺産(遺跡や旧跡)が点在している。しかし、歴史的な中心があるわけではない。散乱する歴史的な事実の痕跡はある。だが、この時代にはこういうことがあったことは言えても、そのつながりの中で、一続きの物語性をもった「町田の歴史」を語ることはかなり難しい。

縄文・弥生時代の遺跡がある。平安時代の末から鎌倉時代には、いわゆる「武士」階層が定着し、小山田家はその領主となって勢力をふるっていたと言われる。しかし、小山田有重が何をした人かと問われて、特記すべきことがどれだけあるだろうか¹。

戦国時代には、北条早雲が関東地方を支配し、その中に組み込まれる。秀吉によって、その支配には終止符が打たれる。徳川の支配下では、天領となり、やがて旗本領になり、小さな区分の中で、たくさんの領主がこの地に相乗りする。

歴史の中にいつもあるけれど、町田が「焦点」となって何かが動いたり、町田に拠点を置く勢力が何かを動かしたりしたことがない。町田を中心として活躍した歴史的な主役がいるわけではない。ここは、入れ代わり立ち代わり、何者かの勢力下に置かれてきた地域なのである。

そして、明治時代。市長も挙げていたように、町田には、「自由民権運動」が生まれる。野津田村出身の石坂昌孝²が、そのリーダーであった。この地区の運動は、旧武士階級ではなく、豪農層を中心とするものであったことが特徴だと言われており、多摩地域における自由党の基盤を作った石坂の功績には特筆すべきものがあつたようだ。しかし、それもまた、町田に固有の運動であつたというよりも、神奈川県令(現在の神奈川県知事)・中島信行らとの連動の中で生じた出来事であつた。「民権運動」の中心的な担い手を生み出したことは、当時の中間層(豪農層)の教養の厚みを物語るものであるが、それはどこまで、町田という地域あるいは都市のその後の発展の核となる

ものだったのだろうか。

さしあたり、こう結論づけてよいように思われる。つまり、町田には連綿とした歴史があるが、近代までの「町田の歴史」には、強い求心力をもつ物語がない。その「歴史」を通じて、「町田とは何か」を語ることは容易ではない。

それでも、こうした歴史の累積と、地理的な条件のかけ合わせの中で、町田という空間の「構造」が作られてきたことは事実である。では、その時「町田地方」とは何か？

多摩丘陵の南端から、「舌」の形に突き出した丘陵地帯。北側が「高く」、南側が「低い」。その丘陵地帯を、彫り込む形で「境川」と「鶴見川」（そのあいだに「恩田川」）が流れている。そして、この舌状の土地を南北に縦断して、「鎌倉街道」という道が走り、境川に沿って現在の「町田街道」が走っている。この、川と道が構成する空間が町田である。

町田は、鎌倉街道が町田街道・境川にぶつかるのできた「交差点」であり、そこに、「宿」や「店」が並んでいった。そしてこの場所に、近代になって、鉄道という第三の「道」が重なる。そこに、次のような「交差路」が生じる。

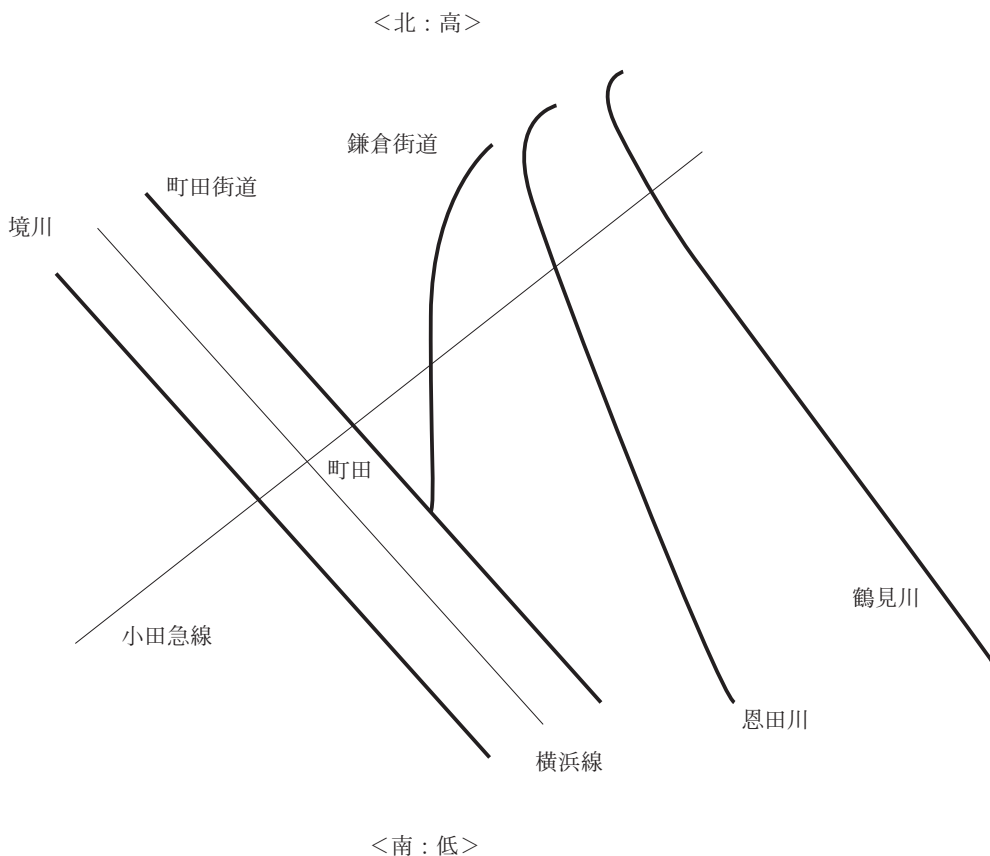


図2：町田の空間図

この交差点を、現在の商業拠点に成長させるきっかけは、近代以降、いくつかあった。

ひとつは、多摩地域に発展した「生糸」生産。絹糸や繭玉を、横浜へと運送する中継地として、町田に「市」が立つようになる。はじめは「本町田」における「二・七の市」（二のつく日と七のつく日に開かれた）。その後は、中心が「原町田」に移り「二・六の市」となる（白井編 1985）。

安政6年（1859）の横浜開港以後、甲州街道の要所八王子と東海道神奈川宿を結ぶ街道の中間地点としての地の利を得て、原町田は、単なる町田近郊地域の交換市場とは異なる、まゆ・生糸などを主要な取引商品とする流通市場に、その性格を変えていくのである。（白井編 1985：87）

そして、明治時代には、輸送手段として「荷車」が往来するようになる。さらには、そのルート輸送力を強化するために鉄道が走る（横浜線の開業は明治41年＝1908年）。これに対して、相模原と東京を直結するルートとして小田急線が敷かれる（開業は大正10年＝1921年）。この二つの鉄道の交差点が町田である。

昭和に入ると、相模原には軍の施設ができる。東京の近縁において、郊外の都市の発展は、しばしば軍事基地の敷設と不可分であるが、町田もまたしかりである。現在の国道16号線は、軍事道路として、戦車が走行できるように平らに広く作られたと言う。

ともあれ、街道・鉄道の交わる場所＝町田、なのである。

正確に言えば、中心がないわけではない。まぎれもなく「原町田」＝「町田駅」こそが中心である。「駅」を中心に発展した商業都市が町田。しかし、政治的な拠点や文化的な遺産などが「中心」を構成することがない。したがって、中心から外に線が伸びていく構図にならない。そうではなく、外から伸びてきた複数の線が交わる形で「町」ができる。結び目としての町田。交差点であり、中継点である場所。

だから、「古層」を探そうとすると、小さな線をたどって、ところどころに露出する「過去の風景」を見るしかない（例えば、鎌倉街道の旧道沿いを歩いてみると、自動車用の道路が敷設される前の、「街道」の名残の風景が見えてくる）。

4. 「まほろ」と「町田」——その照応関係とずれ

では、「まほろ」と「町田」はどこまで重なり、どこでずれをはらんでいるのだろうか。

まずは、その照応関係を確認しよう。実際に町田を歩いてみると、先に見た「まほろ」の空間地図がかなり正確に町田の現実を再現していることが分かる。

「南東」のエリアには、東急デパート（「町田東急ツインズ」）をはじめとする大型の商業施設。そしてその裏手に、古くから栄えている商店街があり、飲み屋やファーストフードショップなどが立ち並ぶ。



〔1〕 南口から続く繁華街

「北東」のエリアには、学習塾や予備校が多い（銭湯は、探し歩いた限りでは今は見つからない）。



〔2〕 町田駅南口から北東エリアを望む

「北西」のエリアには、森野団地。1963年に完成した、東京都住宅供給公社運営の集合住宅=都営住宅。典型的な箱型5階建ての「団地」、11棟が並ぶ。



〔3〕 森野団地

「南西」のエリアには、現在も何軒かのラブホテル。その「ラブホ」と、新しい（高層の）マンションが隣接する。ラブホテルの合間にボーリング場があったりする不思議な空間を構成する。



〔4〕 マンションとラブホテル

このように、見事にカラーの違う四つのエリアが町田駅の周辺には構成されている。

そして、現実に町田の市街・市内に点在するいくつかのアイテムを、三浦は、名前を変えて「まほろ」の町の中に呼びこんでいる。

- ホテル ザ・エルシィ (→エムシーホテル)

エムシーホテルは、まほろ市で一番大きなホテルだ。以前は「まほろシティホテル」という名の地味なビジネスホテルだったが、有名シェフを引き抜いたとかで、リニューアルオープンしてから市民に人気だ。(I-338)



〔5〕 ホテル ザ・エルシィ

・コーヒーの殿堂プリンス（現在は、The Caféと改称されている）（→コーヒーの殿堂 アポロン）

「コーヒーの神殿 アポロン」は、その夜もにぎわいを見せていた。

まほろ大通りの雑居ビルの二階にある「アポロン」は、内装が変だ。(I-281)



〔6〕 The CAFÉ（旧「コーヒーの殿堂 プリンス」）

・町田市民の森公園（→まほろ自然の森公園）

真新しい十八階建てのマンションの十五階に、星は一人で住んでいる。

マンションは JR まほろ駅から徒歩五分の距離にあり、生活するにも仕事をするにも便利だ。だが、この部屋を購入しようと決めた最大の理由は、「まほろ自然の森公園」に近いことだった。

星は毎朝、四十分ほどジョギングする。起伏に富んだ広い公園は、そのルートに組みこむのに最適だ。

自然の森公園は、小さな谷間を作るふたつの丘から成り、三十年ほどまえに、まほろ市が保護指定したらしい。おかげで宅地開発の波に吞まれることもなく、駅から歩いて十五分の場所に、鬱蒼とした森と谷を流れる小川が残った。いまでは花見や紅葉の季節のみならず、週末ごとに、身近な憩いの場としてまほろ市民に愛されている。（II-52）



〔7〕町田市民の森公園

そのほかにも、「町田市民病院（＝まほろ市民病院）」、「山崎団地（＝山城団地）」、「仲見世（＝「曾根田のばあちゃん」の回想に登場する戦後の闇市の名残り）」などは、物語世界の中に対応物を有する実在の場所である。

しかし、すべてがそっくり町田であるわけではない。そこには、小さなずれが見える。

例えば、人口。「まほろ」は人口30万人。町田は、2014年時点で42万6千人（1990年時点で35万人規模）である。つまり、「まほろ」は町田よりも少し小さい。

また、町の細部の記述においても、微妙な差異が確認される。例えば、「南西エリア」の風景。

八王子線の線路を越えれば、そこは「駅裏」と呼ばれる南西の区画だ。昔は青線地帯だった歓楽街で、未だに昼間から立ちんぼがいる。客引きをする女たちの背後には、あやしげな古い木造の平屋がひしめ

きあって、その向こうはすぐ川だ。(I-71:下線引用者)

これは、いつの時代の叙景だろうか。ここでは、作者(三浦しをん)の子ども時代の記憶が現在の「まほろ」に混入しているように見える。

その意味で「まほろ」は町田よりも古い。

ここで、時代設定はいつなのかが問題になる。しかし、多田は携帯電話をもっている。どれだけ古く設定しても、2000年以前ではない(その意味で「現在の町田」が舞台だと言える)。その現在の町田にかつての町田の記憶が混在している、と見るべきだろう。

そして、当然のことながら、町田の街は変わり続けている。「コーヒーの殿堂 プリンズ」が「The Café」になってしまうように。かつてあったのかもしれない「銭湯」がなくなっていくように。したがって、「まほろ」として定着された像はどんどん現実には追い越され、置き去りにされていく。町田の記憶としての「まほろ」、という言い方ができるのかもしれない³。

ともあれ、「まほろ」という多彩色の「空間」には、都市・郊外的地域を構成するありとあらゆる要素が詰め込まれている。その点でも、この「仮想都市」は、町田の姿を映し取っている。

固有名で示される「アイテム」だけでなく、「町の雰囲気」においても、なるほどこれが町田だと思わせる描写がいくつもある。例えば、

夏休みの夜。まほろ駅前の人通りには法則性がなかった。あらゆる方向に流れ、拡散し、ふいに停止し、たむろし、気まぐれに進路を変えた。(I-211)

町田の南口(南東エリア)には、いつでもものすごい数の人がいる。しかし、単に数が多いだけではない。その「導線」が見えない。人の動きが、一定の方向に向かわない。たまっている。うろたうろたしている。そのあいだを、どこかに向かっていくやつがいる(個人的な感覚として言えば、渋谷や新宿の方が、まだ人の流れが見える。人はある方向に導かれて動いている)。この「法則性のなさ」、「導線の不在」が「まほろ」であり、町田である。

そして、その中心市街の雰囲気は、町田に住んでいる・流れ込んでくる人々の、社会的属性の拡散ぶりに関わっている。実際、南東エリアを歩いていると、「若者向け」の「ファーストフード店」「洋服屋」も多いけど、意外に古臭い「乾物屋」「金物屋」、あるいは郊外の中産の主婦層を狙った「食器」や「家具」の店もかなりある。それほど広い商業エリアではない。一筋か二筋の商店街なのだが、全体として顧客層を絞れない「多層的なマーケット」になっている。おばちゃんから高校生まで、セレブからヤンキーまでが、混在する場所。

その「ただ中」に「多田便利軒」はある。



〔8〕多田便利軒（ロケ地⁴）

6. 〈ジモト〉としての「まほろ」？

複数の、多様な線分の交錯地点。それが「町田＝まほろ」である。多様な来歴をもつ人々の錯綜の場と言えよいだらうか。

その中であって便利屋は、顧客が何者であってもその問題を代行する。

そして、「便利屋たち」は、依頼者たちに自己を投影する。多田や行天は、「まほろ」の多様な住民の、誰にでも「擬態」できる。その擬態の反復を通じて、「まほろ」を描く。それが「まほろ駅前シリーズ」である。その「まほろ」は、町田の擬態として設定されている。

では、結局のところ、「まほろ」＝「町田」とはどのような町なのか。より正確に言えば、「まほろ」へと変換されたことによって、町田のどのような姿がそこに浮かび上がってきたのだろうか。

ここで、ひとつの参照項として、〈ジモト〉という言葉呼び出してみよう。

〈ジモト〉は、自分が生まれ育った地域——これを広義の「地元」と記そう——を指す概念である。その点では〈故郷〉と類義的であるが、言葉の立ち現れる歴史・社会的文脈を異にしている。図式的に対照化すれば、〈故郷〉は、近代化・産業化と都市化の流れの中で地方（農村）から都市（都会）へと大量の人口が移動していった時、この都市流入民が自分の生まれ育った場所を多少なりとも回顧的に（後から、また離れた所から）想起・想像するところに結ばれるイメージである（成田1998）。これに対して、〈ジモト〉は、後期近代化と郊外化の段階において、都市であれ地方であれ、またそこを離れているにせよそこに住んでいるにせよ、自分自身が生まれ育った生活圏を指し示す際に浮上する言葉である。この時、〈故郷〉が多少なりとも静態的で均質な共同体（村・田舎）の像を喚起する概念であるのに対し、〈ジモト〉はより個人的な帰属感覚にもとづいて、その外延を流動化させながら流通する主観的なイメージとして浮上するものと言うことができる（川

端2013参照)。

そして近年(2010年前後から)特に、地元志向(〈ジモト〉志向)と呼ばれるような選好のスタイルが、とりわけ地方都市や郊外地域において顕著になってきたことが指摘されている(三浦2010, 土井2010, 難波2012, 阿部2013)。都市と地方あるいは郊外のあいだに、就学機会や就職機会の落差、さらには賃金や年収の格差があるとしても、別に無理して大都市に出ていなくてもよい、という感じが広がっている。どうやら近年、とりわけ心理的な水準において、地方都市や郊外で生まれ育った若者たちを外部の空間へ押し出し、それを大都市中心へと吸引する力が弱まり、〈ジモト〉にとどまる、あるいは戻ることをうながす誘因が強く働くようになっているのである⁵。それにもなって、〈ジモト〉でもいいじゃないか、〈ジモト〉で何が悪い、〈ジモト〉っていいかも、というゆるい〈ジモト〉礼賛の感覚が語られたり、歌われたりするようになっている⁶。

「まほろ駅前シリーズ」の二人の中心人物はともに、1970年代後半に生まれた「郊外ネイティブ」であり、「まほろ」をいったん離れたものの、そこに舞い戻ってきた若者として設定されている。彼らは、「まほろ」の中心にまったりと腰を落ち着けて、どこにも行こうとしない。このどんづまりの町の中で、果てしない反復の日々を送っている。多田と行天にとって、「まほろ」は〈ジモト〉であり、そのホームタウンにいかにとどまり続けるのかが、物語全体の賭け金になっている。その反復と滞留の場所として、「まほろ」は〈ジモト〉という言葉にふさわしい性格を備えていると言える。

しかし、「まほろ駅前シリーズ」が単純に〈ジモト〉言説を反復しているというわけではない。この小説は、固有の現実感覚を働かせて、「まほろ」という町を造形している。そこに展開される物語は、〈ジモト〉を語る言説との異同、あるいは間テクスト的な緊張関係の中で、ひとつの認識視角を提起しているように見える。

では、「まほろ」はどのような形でこの「町」を形象化しているのだろうか。

これまでに見てきたように、「まほろの町」は自足的に閉じた空間であり、「外部」へと人を押し出す力をもたない。登場人物たちは、「外へ向かっていく」ベクトルを示さない。この「町」の中で、小さな領土の奪い合いをくり広げ、あるいはささやかな自分のテリトリーを守ろうとする。だが、その「町」の将来への希望が語られるわけではない。むしろ、もう何も起こらない場所として「まほろ」は描かれる。その「町」に滞留して、特に「稼ぐ」とか「儲ける」とか、「地位を築く」とか、そういうことに執心しない。ただ、日常の反復を生きる主人公たち。この「自足感」は〈ジモト〉的だと言えるだろう。

だが他方で、「まほろ」は、しばしば〈ジモト〉的なものとしてさし出されるイメージのような、「穏やか」で「落ち着く」、「ほっとする」場所などではない。むしろ、人々は、それぞれの生活の箱の中で、傷つけ合い、傷を負いながら生きている。それぞれに辛い物語がある。それは、地域の中に共同化されることのない、「私的」で「個別」な物語である。多様な個別の軌道線は、交わることはあっても、ひとつに融合して「大きな物語」(集合的記憶)を構成することはない。その孤立と孤独の感覚(そのような社会関係の形)を「郊外的」と呼ぶことは可能である。

しかし、ここで私たちは、この物語世界の成り立ちに即して、ひとつの社会的な問いに遭遇する。「まほろ」の町が穏やかで安全な場所でもなく、将来に開かれたヴィジョンを与えるのでもなく、強い共同体的な絆に人々を包摂するのでもないとするれば、なぜ彼らはここに滞留しようとするのだろうか。おそらくこの問いに対しては、さらに二つの要素に目を向ける必要がある。ひとつは、便利屋の周辺に集まる若者たち——特に、行天春彦——が、抱え込んでいる負の記憶と、これに由来する生への怯えの感覚。そしてもうひとつは、これを前提とするからこそより一層鮮烈なものになる、便利屋という場所の「ユートピア性」である。

7. ユートピアとしての「まほろ」？

「まほろ」の町は、少なくとも穏やかで、やさしい世界ではない。その空間を生き抜くタフネスを要求する。ゆるくてタフな身体性。これが「まほろ」という町の物語のヒーローにはふさわしい（映画・ドラマでは、特に松田龍平がこれを体現しようとしている）。そして、映画・ドラマにおける「松田龍平」的なものが手ごかりにしてもう一步踏み込んでみると、そのタフな身体がどこかで、生きることそのものへの「怖れ」を宿していることに気づく。行天春彦がほかのどこにも行こうとせず、「便利屋」にとどまる理由を考える時、ここに醸し出される「怯え」の感覚を無視することはできない。その感覚こそが、おそらく、〈ジモト〉への滞留という態度を読み解くひとつの鍵である。言い換えれば、どこへも出ていこうとしない彼らの身構えの前提には、郊外の町が密かに累積してきた暴力の記憶が関わっている（小説は、そのような設定を挿入することで、この「態度」にリアリティを与えているのである）。

この記憶に怯えつつ、なおかつこの町に留まるためには、その内部に彼らの「居場所」が確保されなければならない。言うまでもなく、それが「多田便利軒」である。

前章において見たように、「便利屋」は、人々の孤立した生活圏——ブラックボックス——を覗き見ることを可能にする仕掛けである。彼らのもとで、記憶と記憶は共鳴し、「町」は線と線のつながり、あるいは交わりを生み出す。そこには、暴力の記憶に慄く者たちが、その「怯え」を隠しつつ、緩やかな交わりを保ち続けることのできる場が浮かび上がる。これを私たちは先に「ユートピア」と呼んだ。言うまでもなく、ユートピアは現実にはない場所であるが、現実と無関係に成立する夢の舞台ではない。むしろ、現実の生活が抱え込んでいる困難を下地にして、そこから浮き上がる形で想像される「反現実」の場所である。だから、ユートピアの前提には明確な現実感覚がある。その現実感覚によってたぐり寄せられていくのが、それぞれの人物の抱えている「怯え」なのである。

『まほろ駅前狂騒曲』の中で、多田は行天に問いかけている。「怖いもんなんかあるのか？」と。これに対して行天は「あるよ。記憶」と即答する。しかし、その答えの意味を多田はすぐには理解できない。「記憶が怖いとは、どういう意味だろう」と彼は内心で考えている（Ⅲ—65）。この会話に、「まほろ駅前シリーズ」における「関係」の形が凝縮されている。それぞれが、平然として

タフな構えを見せながら、その外観の背後に「記憶」を抱えている。そして、それは「怖れ」の源泉である。だが、彼らはその記憶を容易には共同化できない。他者の怖れは、「私」には見えない場所に隠し込まれている。一人ひとりの内面に進行する、孤独な戦いの物語。それを前提にして、「多田便利軒」の物語がある種のやさしさを感じさせるのは、そこに、他者の内面に足を踏み込むことなく、しかしそれぞれの傷を互いに静かに受け止めようとするような、緩やかな相互依存の関係が成り立っているからである。

あるいはここで、次のように言い換えることができるかもしれない。この小説は、この孤独な関係の群れの中に怯えた目をした青年を投げ入れることによって、「町」そのものを一種のユートピアへと変換することに成功しているのである、と。したがって、「まほろ」はそっくりそのまま町田の現実であるわけではなく、彼らの姿がこの町に集い、溜まっている者たちの等身大像であるわけではない⁷。しかし、この町を、物語の場所、人と人の交わりの場として描き出すためには、その中心に、タフな身体と脆弱な心を抱えた「二人の若者」を配置することが必要であった。彼らのあいだに生まれる「緩い連帯」を居心地の良いものと受け止める。この感性——おそらく「町田的」と形容することのできる——が、「まほろ」という場所の物語を要求しているのである。

【注】

- (1) 小山田有重は鎌倉時代初期の武士（生没年不詳）。桓武平氏秩父流の出で、秩父太郎太夫重弘の子。現在の町田市域の内、相原・小山を除く全域にあたる小山田荘に移住し、小山田別当有重を名乗り、小山田氏の祖となった。治承4年（1180年）、源頼朝挙兵の時は平家と行動を共にし、平家都落ちの際にあやうく斬首されそうになる。以後、頼朝に仕え、元暦元年（1184年）には、頼朝に反抗的であった甲斐源氏・一条忠頼の暗殺に加担した（町田地方史研究会 2005：51-52）。
- (2) 石阪昌孝は、天保12年（1841年）多摩郡野津田村の石阪伴助の三男に生まれ、同村名主石阪又二郎の養子となる。明治三年、小野郷学を設立、教育による村の一新をはかる。第八区区長を務めるあいだに、神奈川県令中島信行に認められ、県小属に抜擢される。明治12年神奈川県議員、初代議長となるが一年で辞任。その後、「不平等条約」の認識をもって自由民権運動に入る。明治14年政治結社融貫社を設立。その後社員を引き連れ、板垣退助の自由党に入党。南多摩郡自由党の基盤を作る。明治23年から29年まで、国会議員。29年には群馬県知事となる。晩年には家産が傾き、不遇のうちに明治40年（1907年）没（町田地方史研究会 2005：25）。
- (3) テレビ版『まほろ駅前番外地』に対するツイッター上の反応には「昭和な感じ」が良いという感想がある。確かに「多田便利軒シリーズ」にはレトロな雰囲気があり、一種のノスタルジーを誘う作品になっている。
- (4) 映画・テレビ版の「多田便利軒」の撮影に使われた場所は、町田駅の南東エリアに二ヶ所ある。写真はその内のひとつ。
- (5) この意味での〈ジモト〉感覚を浮上させた要因としてはいくつもの項目を挙げることができる。まずは、1990年代以降に顕著となってきた消費社会の空間的配置転換。例えば、三浦展が「ファスト風土化」

「ジャスコ化」と呼んだ現象。コンビニエンス・ストアの普及、大型量販店の展開、ロードサイドビジネスの浸透による景観の均質化など。あるいは、若林幹夫が「モール化」と呼ぶ現象。すなわち、郊外型のショッピングセンター、ショッピングモールの増加と、その空間設計モデルの拡張的な遍在化。これと連動して、ネット環境の整備と流通・運輸業界の再編。それらにともなって生じる（特に消費の場としての）都会－地方の格差の感覚の摩耗。さらには、雇用の流動化（安定した職を見つけるのは容易ではない）と労働市場の飽和（都会へ出れば仕事があるというわけではない）。経済全体の低成長下（脱成長型社会への転換）と少子化にともなう家族関係・親子関係の変質（「パラサイト」戦略の広がり、子離れ・親離れの困難）。

- (6) 例えば、「ファンキー・モンキー・ベイビーズ」の「八王子」。原田陽平が「マイルドヤンキー」と名づけた、新しい世代的・階層的文化の担い手たちも、この意味での〈ジモト〉志向によって特徴づけられる。ほどほどの幸福感を希求する、安定志向の彼ら／彼女らは、「上京」して一旗あげようというような上昇志向をもたない、新しい保守層を形成している（原田 2014）
- (7) 「便利屋」は、物語の駆動装置であると同時に、現実の町を虚構の町へと変換するための装置でもある。したがって、「町田」と「まほろ」の落差を生んでいる決定的な要因は「多田便利軒」の有無である。町田とは、「多田便利軒」のない「まほろ」のことであると言えるかもしれない。

*写真はすべて筆者撮影（2013年11月～2015年10月まで）

【テキスト】

- 三浦しをん 『まほろ駅前多田便利軒』文芸春秋、2006年（→文春文庫、2009年）
—— 『まほろ駅前番外地』文芸春秋、2009年（→文春文庫、2012年）
—— 『まほろ駅前狂騒曲』、文芸春秋、2013年

【参考文献】

- 阿部真大 2013 『地方にこもる若者たち 都会と田舎の間に出現した新しい社会』、朝日新書
土井隆義 2010 「地方の空洞化と若者の地元志向——フラット化する日常空間のアイロニー」、『社会学ジャーナル』、筑波大学社会学研究室
原田曜平 2014 『ヤンキー経済 消費の主役・新保守層の正体』、幻冬舎新書
堀江泰紹 1990 『はじめてのわかりやすい町田の歴史』、国書刊行会
川端浩平 2013 『ジモトを歩く 身近な世界のエスノグラフィ』、御茶の水書房
町田地方史研究会（編） 2005 『町田歴史人物事典』、小島資料館
「町田の歴史をたどる」編集委員会 1981 『町田の歴史をたどる』、町田市
「まほろ駅前狂騒曲」制作委員会 2014 『まほろ駅前狂騒曲 オフィシャルプログラム』、リトルモア
宮台真司 1997 『まぼろしの郊外 成熟社会を生きる若者たちの行方』、毎日新聞社
三浦 展 1999 『「家族」と「幸福」の戦後史 郊外の夢と現実』、講談社現代新書1482
—— 2004 『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』、洋泉社

- 2010 『ニッポン若者論——よさこい, キャバクラ, 地元志向』, ちくま文庫
- 三浦しをん 2014 「伝えたいという希望を持つことが, 書き続ける力になる」(インタビュー), 『抒情文芸』, 第149号, 抒情文芸刊行会
- 成田龍一 1998 『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』, 吉川弘文館
- 2000 「都市空間と『故郷』」, 成田他『故郷の喪失と再生』, 青弓社
- 成田龍一・藤井淑禎・安井真奈美・内田隆三・岩田重則 2000 『故郷の喪失と再生』, 青弓社
- 難波功士 2012 『人はなぜ〈上京〉するのか』, 日経プレミアシリーズ, 日本経済新聞社
- 小田光雄 1997 『〈郊外〉の誕生と死』, 青弓社
- 荻野昌弘 2012 『開発空間の暴力 いじめ自殺を生む風景』, 新曜社
- 内田隆三 2000 『「故郷」というリアリティ』, 成田他『故郷の喪失と再生』, 青弓社
- 白井國雄(編) 1985 『ふるさとの思い出 写真集(明治・大正・昭和)町田』, 国書刊行会
- 若林幹夫 2007 『郊外の社会学——現代を生きる形』, ちくま新書(649), 筑摩書房
- 若林幹夫(編) 2013 『モール化する都市と社会 巨大商業施設論』, NTT出版
- 若林幹夫・三浦展・山田昌弘・小田光雄・内田隆三 2000 『「郊外」と現代社会』, 青弓社